

A. D. グリング編、対訳漢和英字書 *Eclectic Chinese-Japanese-English Dictionary* (1884)

の参考文献をめぐって

宮田和子

要旨： 編者グリングが使用した参考文献に再検討を加えることが、この報告の目的である。サマーズ著 *The Rudiments of the Chinese Language* (1864)は、やや形を変えて CLASSIFICATION OF RADICALS (部首の分類) に紹介された。ガンブルが作成した漢字の頻度別一覧表は、圧倒的な支持を得て後世への道を拓いた。

キーワード： サマーズ (James Summers)、ガンブル (William Gamble)、部首の分類

A.D. グリング編、対訳漢和英字書 (以下 ‘グリング字書’ と略称) が世界各地の図書館、資料館に所蔵されているうえに、ウェブサイトで公開されているにも拘わらず、研究対象として扱われた形跡がないことに疑問を感じた、米国マサチューセッツ州在住の Dominique Kenshi Numakura 氏 (以下 ‘DKN 氏’ と略称) が、日本英学史学会本部第 465 例会 (2011.7.2) で発表し、大きな反響をよんだ。

その後 DKN 氏は、編者グリング (Ambrose Daniel Gring (1849~1934)) とその妻ハティー (Hatti Gring, ?~1910) の日本における足跡を精力的に調査し、さらに在米の家族に宛てたハティーの書翰集を発掘して解読し、解説を施した。

筆者 (宮田) は、英文資料を中心に、グリングが参考文献としてあげている文書のなかからグリング字書の成立過程を探ろうとして、2012 年 3 月杭州 浙江財経学院における国際シンポジウムで報告したが、十分な成果は得られなかった。

そこで今回あらためて参考文献を見なおし、これまでに入手した新情報を補って、再度の報告を試みることにした。ページ表記は、前回の杭州 浙江財経学院に於ける報告と同様、明治学院が公開したネット情報による。グリングが提示した参考文献はメモ程度の簡単なものでしかないので、→の右側に説明を添えた。

グリング字書は、漢字を構成する諸要素の解明に、執拗ともいえる精力を傾注している。そ

の実情を最もよく伝えていると思われる項目に、‘CLASSIFICATION OF RADICALS (部首の分類)’がある。部首を画数によらず、意味によって分類しようという、新しい試みである。筑波大学の太塚秀明氏のご教示により、1864年に刊行されたサマーズ (James Summers, 1829~1891) 著 *The Rudiments of the Chinese Language with Dialogues, Exercises, and a Vocabulary* がその底本であることを知ることができたのはありがたいことであった。ご教示にヒントを得て調査を進めた結果、サマーズとグリングの緊密な連携は、グリング字書の構想の発端にまで遡ることが、あきらかになった (後述)。

William’s Syllabic Dictionary →ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 衛三畏 1812?~1884) の著書 *A Syllabic Dictionary of the Chinese Language; Arranged According to the Wu-Fang Yuen Yin, with the Pronunciation of the Characters as Heard in Peking, Canton, Amoy and Shanghai* 『漢英韻府』を指す。本書は上海の American Presbyterian Mission Press で印刷され、1874, 1889, 1896, 1903年に上海の美華書院が出版した。各書の扉は刊年のみが異なる。扉の ‘Wu-Fang Yuen Yin’ は「五方元音」。「五方」とは東西南北と中央、つまり中国全土を指す。

さらに1909年にはウエード (Thomas Francis Wade, 威妥瑪 1818?~1895) のローマ字化方式によって、American Board of the North China Mission (華北公理会) 委員会がアレンジしなおしたものを、北通州の共和書院が刊行した。

Morrison’s Chinese Dictionary →モリソン (Robert Morrison, 馬礼遜 1782~1834) は清国の禁教政策のさなか、プロテスタント宣教師としてはじめて入華した。モリソンが著した『中国語字典』(仮称) は英文書名を *A Dictionary of the Chinese Language in Three Parts. Part the First; Containing Chinese and English, Arranged According to the Radicals; Part the Second, Chinese and English, Arranged Alphabetically, and Part the Third, English and Chinese* (1815~23) といい、3部6巻からなる現存最古の華英・英華辞典で、第1部と第2部では華英、第3部では英華をあつかう。諸版があるのは第2部「五車韻府」に限られる (1865, 1907, 1913)。ほかに『広東省土話字彙』 *Vocabulary of the Canton Dialect* (1828) など。

Medhurst’s Chinese Dictionary →メドハースト (Walter Henry Medhurst, 麦都思 1796~1857) が著した主な辞典に、つぎの3書がある。

- (1) 『華英字典』(仮称) *Chinese and English Dictionary; Containing All the Words in the Chinese Imperial Dictionary, Arranged According to the Radicals* (vol.1:1842, vol.2:1843)
- (2) 『英華字典』(仮称) *English and Chinese Dictionary, in Two Volumes* (vol.1:1847, vol.2:1848)
- (3) 『福建語字典』(仮称) *A Dictionary of the Hokkeen Dialect of the Chinese Language, According to the Reading and Colloquial Idioms: Containing about 12,000 Characters, the Sounds and Tones of*

which are Accurately Marked;--- and Various Examples of their Use, Taken Generally from Approved Chinese Authors.---Accompanied by a Short Historical and Statistical Account of Hokkeen; A Treatise on the Orthography of the Hokkeen Dialect; the Necessary Indexes, &c. (1832)

Callery's Systema Phoneticum → Systema Phoneticum Scripture Sinicae (1841) は、外国人が漢字を学ぶための方法として、仏人カルリー (Joseph Marie Callery, 1810~1862) が編み出したシステム。インドの Serampore 在住グループのひとり、マーシュマン (Joshua Marshman, 馬殊曼 1768~1837) による漢字の構成要素に関する画期的な研究成果¹をもとに改良を加えた。

カルリーのシステムは、ドーリトル (Justus Doolittle, 盧公明 1823~1880)、ウィリアムズ (Samuel Wells Williams, 衛三畏 1812 ?~1884)、チャーマーズ (John Chalmers, 湛約翰 1825~1900)、マーティン (William Alexander Parsons Martin, 丁韞良 1827~1916) らによって継承された。

Marshman's Clavis Sinica → マーシュマン (上述) の手になる *Clavis Sinica* (中国語学習の手引き書)。1814 年刊²。

Hepburn's Japanese-English Dictionary → ヘボン (James Curtis Hepburn, 平文 1813~1911) による『和英語林集成』*A Japanese and English Dictionary; with an English and Japanese Index*。1867 年に初版、以後 9 版まで版を重ねた。英語で書かれた、わが国最初の和英辞典。

Hoffman's Japanese Grammar → ホフマン (Johann Joseph Hoffmann, 1805~878) による『日本語文典』は、初版 (1868 (扉の表記は 1867)、蘭語版)、2 版 (英語版 1876)、1877 年ドイツ語版も刊行された³。

ホフマンは 1830 年シーボルト (Philipp Franz Balthasar von Siebold, 1796~1866)⁴に会って日本に興味をもち、日本の研究に専念するかたわら、中国語も学んだ。ライデン大学の日本語科教授となったが、日本の地を踏むことなく、ハーグで没した。

Aston's Grammar of the Japanese Written Language → アストン (William George Aston, 1841~1911) は、ジャパノロジーのパイオニアのひとりとして名高い。明治 2 年 (1869) 『日本口語小文典』(*A Short Grammar of the Japanese Spoken Language*) を、ついで明治 5 年 (1872) 横浜で『日本語文典』(*A Grammar of the Japanese Written Language*) を公刊した。

¹ *Dissertation on the Chinese Language, or a particular and detailed account of the primitives, formatives, and derivatives* by J. Marshman D.D. (*The Chinese Repository* vol. ix:587~616)

² マーシュマンは複数の中国人の学者と、北京在住のイエズス会士ロドリゲス (M.Rodrigues) , さらにマニング (Thomas Manning, 曼寧) の協力を得て、*Clavis Sinica* を書きあげた (James Summers 1863: *A Handbook of the Chinese Language* Preface vi) .

³ 『ホフマン日本語文典』三澤光博譯、東京明治書院 1968 i.

⁴ シーボルトは 1823 年オランダ商館つき医師として長崎に着任した。

Transactions of the Asiatic Society of Japan→1872年(明治5)、横浜在住の欧米人が、日本研究を目的とする団体「日本アジア協会」(The Asiatic Society of Japan)を設立した。1865年(慶応1)駐日公使として来日したパークス(Harry Smith Parks, 1828~1885)は、みずから日本の言語や文化を学ぼうとはしなかったが、部下がそれぞれの専門分野で自分の特質を伸ばせるような環境づくりを重視した。こうしてパークス学派とでもいうべき流れをつくり、日本の言語、文学、地理、芸術、製造業など多くの分野で活発な調査研究が行なわれた。パークスは1876年から1878年まで協会の会長をつとめている。こうしてアストン、サトウ(Ernest Mason Satow, 薩道義 1843~1929)、チェンバレン(Basil Hall Chamberlain (1850~1935)、ヘボン、グリフィス(William Elliott Griffis, 1843~1928)ら一流のジャパノロジストが日本アジア協会を舞台に交流し、たがいに刺激しあって、それぞれの研究分野ですぐれた業績を残した⁵。

Edkins' Introduction to the Study of Chinese Characters →*Introduction to the Study of Chinese Characters* は1876年 Stephen Austin and Sons が発行した。エドキンズ(Joseph Edkins, 艾約瑟 1823~1905) は博学多才をもって知られ、上海語の文法書のほかに、官話文法をあつかった *A Grammar of the Chinese Colloquial Language Commonly Called Mandarin* (1857, 1863)、王韜や李善蘭の協力を得て漢訳した数々の科学技術書、人文、社会科学関係の著作がある。

Wade's Progressive Course of Colloquial Chinese→ウェード(Thomas Francis Wade (前掲) 著。元来 Colloquial Series『語言自彙集』と Documentary Series『文件自彙集』の二部作で、初版は1867年、再版はヒリアー(Walter Caine Hillier, 1849~1927)との共同編集で、1886年に刊行された。領事館関係者が短期間のうちに口語を修得し、公的文書を解読できるように配慮したものである。

Indices of Legge's Chinese Classics →レグ(James Legge, 理雅各 1815~1897)は、王韜の協力を得て、中国古典の英訳に挑んだ。『詩経』『書経』『春秋左氏伝』『大学』『中庸』『論語』『孟子』を訳し、のちに『易経』『礼記』を加えた最重要の儒教経典を訳して、注釈を施した。

Bridgman's Canton Chrestomathy →*A Chinese Chrestomathy in the Canton Dialect* (1839)は、ブリッジマン(Elijah Coleman Bridgman, 裨治文 1801~1861)が、英語を学びたい中国人と、広東語を学びたい外国人の双方を視野に入れて編纂した。本文は6章からなり、中国語学習、身体各部、親族関係、社会階層、日常生活、商売など身近な事柄を題材としている。1841年に物理、建築、農業、数学、地理、鉱物、植物、動物、医療、政治などをあつかう11章を加えた増補版を、ウィリアムズ(S.W. Williams)が出版した。

Stent's Vocabulary →*A Chinese and English Vocabulary in the Pekinese Dialect* 『漢英合璧相連字

⁵ 秋山勇造「日本アジア協会と協会の紀要について」: pp. 71~80

彙』の初版は、ステント (George Carter Stent, 司登得 1833~1884) が、中国の小説に現れる奇妙な習慣、日常生活、漢字の組み合わせ、イディオムなど、先行著作にないものに焦点をあわせて収集した語句をもとに、初心者用に編纂した。1871年に公開された初版について、1877, 1887, 1898年に続版が出、1898年版にはマックギリブレイ (Donald MacGillivray) が改訂者として名を連ねている。

ステントは本書(華→英)を英→華に編集しなおすしごとに着手していたが、3分の1を残して未完に終わった。未完の部分をヘメリング (K. E. G. Hemeling) が引き継いで完成させ、巻末に補充リストと正誤表を付して、1905年に公開した。1907 (2nd.ed.) , 1911 (3rd.ed.) , 1930 (8th ed., 9th ed.) と続版が出ている。

Martin's Analytical Reader → *The Analytical Reader, a Short Method for Learning to Read and Write Chinese*. 上海の Presbyterian Mission Press が 1863年と 1897年に刊行した。

ガンブル (William Gamble, 1818~1866) は聖書と 27種の道義書に使用された漢字の総数約 1,200,000字を、中国人助手の協力を得て詳細に分析した結果、総数はたしかに多いが、出現する字種の総数は 5,150字に過ぎないことを確認、適切に選択すれば 5,000~6,000字で十分実用に耐えること、また頻用される文字の種類はごく少数で、書物の大部分を構成するのはこうした少数の文字であり、のこりの大多数の文字はめったに現れない、という重要な結論を導き出した。マーティン (William Alexander Parsons Martin, 丁隴良 1827~1916) は、このガンブルの分析を大きく評価し、効率的に漢字を習得する方法として、本書 pp.2~5 に紹介した。

本書は 4部からなり、漢字の選択、分析、翻訳、学習法から始めて、天地創造、贖罪など基督教を意識した題材を随所にちりばめながら、使用頻度の多い漢字から順を追って、学習者に理解させるように配慮している。

Summers' Handbook → サマーズ (James Summers, 1828~1891) が著した *A Handbook of the Chinese Language / Parts I and II, /Grammar and Chrestomathy, / prepared with a view/ to initiate the student of Chinese in the rudiments/of this language, and to supply materials/ for his early studies./*⁶

(1863)。本書はロンドンの King's College の講義に参加して、中国語の基礎知識の獲得を目指す学生のためのテキストとして編まれた。欧州で中国語を扱った最初の著作はドミニカ人のヴァロ (Pere Varo) によるもので、1703年に刊行された。

序文でサマーズは欧米人による従来の著作に、かなり厳しい批判の目を向けている。マーシユマンの *Clavis Sinica* (前述) は一読に値するが、欠陥も見逃せない、モリソン (R. Morrison 前述) の文法書 (1815) は貴重な情報を含んではいるが、準備期間が短かすぎて不備が多いとし、

⁶ 斜線 (/) は改行を示す。

レミュザ (M. Abel-Remusat, 1788~1832) の文法書を明晰かつ科学的な著作として評価した。現存最古のモリソン (R. Morrison) の辞典の価値を認めながらも不完全であると批判、デイヴィス (John F. Davis, 戴維斯 1795~1890) の『賢文書』は初学者に好適と評価し、寧波の領事トム (Robert Thom) によるイソップの寓話、エドキンズ (Joseph Edkins (前述)) の上海語文法と官話文法にも高い評価を与えている。ウェード (Thomas Francis Wade (前述)) の『尋津録』(1859) については、北京語を基調としているため、広範囲の通用が危ぶまれる点と、第1部のテーマが天空の諸現象に限られている点を指摘、事情が許せば補足して完成度を高めてほしい、と結んでいる。最後にサマーズはレグ (James Legge) の *The Chinese Classics; with a translation, critical and exegetical notes, prolegomena, and copious indexes* (1861) を挙げ、中国古典の分野でレグに勝る翻訳者はいない、と激賞している。

Chinese Repository, Record and Review, etc. → Chinese Repository (わが国では‘支那叢報’と訳された) の創刊号 (1832) は広東で発行された。最初のごく小さな月刊雑誌で、ブリッジマン (E.C. Bridgman) が、ロバート・モリソン (Robert Morrison) の支援を受けて編纂した。事業の拡大に伴ってウィリアムズ (S.W. Williams) がもつぱら編纂を担当する。1832年に誕生したこの「支那叢報」はその後刊行を続けて、全20巻を公刊、最終号は1851年(孝明天皇の嘉永4年)12月、168ページに及ぶ総索引を付して完結している。編集者が重きをおいたと思われる論説や、報告、書評などは、Articles や Reviews の欄に収録し、活字も大型のものを使った。この雑誌は全部で21,000冊を印刷したといわれるが、完結後5年目の1856年12月に広東に火災があり、6,500冊を焼失したという。

Gamble's Select Characters → ガンブル (William Gamble, 1818~1866) は日中英各国語の多様なフォント (特に中国語の小型フォント) の作成に、electrotyping (電鋳法) の技術を駆使して大きく貢献した。日本から日中英のフォントの大量注文を受け、1869年の帰国をひかえて、長崎通詞本木昌造 (1824~1875) の懇請を受諾、印刷技術を伝授した⁷。Select Characters は聖書の中国語訳に使われた漢字の使用頻度別一覧表。

List of Characters in the Fonts of the Presbyterian Mission Press, Shanghai, and Tokio Type Foundries → 長老会ミッションプレス、上海、東京の活字鋳造所の活字に使われた漢字のリストをも調査の対象としている。詳細は不明だが、上海ではガンブルが関与し、東京ではグリング自身が調

⁷ 東京外国語大学、加藤清子氏のご教示による。The Chinese Recorder and Missionary Journal vol. 1 (December, 1868) p.167 に“The Presbyterian Mission Press at Shanghai”と題する年次報告が掲載され、要職にありながら謙虚、勤勉なガンブルを称賛する記事が載っている。

査にあたったと推測される⁸。

On Chinese Lexicography, with Proposals for a New Arrangement of the Chinese Characters of that Language (中国語の字書編集について・・・新方式による漢字の配列を提案) と題する論文がある。サマーズが 1884 年 1 月 23 日に行なった講演の記録である。

‘漢字は西暦紀元を遡ること 2,000 年、エジプトの象形文字、アッシリアの楔形文字、最古のインドの文字と並んで、最古の原始的な文字だが、今もなお魔術的な影響力を持ち続けているという点で、他に類をみない。’ と前置きして、六書、書体、日本語への影響などを例にあげて詳細に論じたあと、つぎの字書をいかに編集するかについて、活発な意見が交わされた。

最後に議長は、サマーズの提案を詳細な討議の俎上に載せるのは時期尚早であるとして、とにかく實際役に立つかどうかをきめて (The best test would be the practical test) になるという理由で、新しい字書が出版されて、手にとってみるまでは、判断を差し控える、と述べた。

ここにいう ‘新しい字書’ は、グリッグ字書を指すのかもしれない。グリッグ字書が出版されたのも同じ 1884 年なので、グリッグとサマーズの先陣争いといった事態も想像できないわけではないが、やはり憶測の域を出ない。

なお再調査の過程で、ガンブル (William Gamble) の医療活動に関する報告書を見つけたので、その概略を記しておく。看護要員の賜暇、帰国に伴う交代の実態、現地民の不信感を払拭する上で医療活動の果たす役割、安息日の問題などをとりあげ、病院の決算報告、外科手術による切断部位の施術前後の状況、などを詳細に記録している (*Reports of Gouddy Memorial for Men and Statistics of the William Gamble Memorial for Women and Children, 1907* 東洋文庫蔵)。上海の Methodist Publishing House が 1908 年に公刊した。

⁸ (グリッグ字書 INTRODUCTION xxviii)。

‘London Mission Press で印刷された旧約聖書の異なる漢字の数はわずか 3,946 字、一方 Presbyterian Mission Press で印刷された新約聖書の場合はさらに少なく 2,713 字にすぎない’ という記述について ‘Special Inquiry on this point at the largest type foundry in Tokio, and the largest Chinese-Japanese newspaper office in the city, has confirmed the writer that the facts ascertained for China will be found true for Japan as well’ (この点について東京の最大の活字鋳造所と、同じく東京最大の中日新聞社を精査した結果、中国で確認された事実はそのままだ日本にもあてはまることを確信するに至った) とグリッグは述べ、東京の調査はグリッグ自身が行なったものであることを、強調している (グリッグ字書 INTRODUCTION xxviii)。ガンブルと印刷技術については『本と活字の歴史事典』(印刷史研究会編 2000) pp.235~384 に詳しく、本木昌造の関与の範囲を含む従来の定説に新たな疑問を呈している。

近代東西言語文化接触研究会

本会は、16世紀以降の西洋文明の東漸とそれに伴う文化・言語の接触に関する研究を趣旨とし、具体的には次のような課題が含まれる。

- I. 西洋文明の伝来とそれに伴う言語接触の諸問題に関する研究
- II. 西洋の概念の東洋化と漢字文化圏における新語彙の交流と普及に関する研究
- III. 近代学術用語の成立・普及、およびその過程に関する研究
- IV. 欧米人の中国語学研究（語法、語彙、音韻、文体、官話、方言研究等々）に関する考察
- V. 宣教師による文化教育事業の諸問題（例えば教育事業、出版事業、医療事業など）に関する研究
- VI. 漢訳聖書等の翻訳に関する研究
- VII. その他の文化交流の諸問題（例えば、布教と近代文明の啓蒙、近代印刷術の導入とその影響など）に関する研究

本会は、当面以下のような活動を行う。

1. 年3回程度の研究会
2. 年2回の会誌『或問』の発行
3. 語彙索引や影印等の資料集（『或問叢書』）の発行
4. インターネットを通じての各種コーパス（資料庫）及び語彙検索サービスの提供
5. (4)のための各種資料のデータベースの制作
6. 内外研究者との積極的な学術交流

会員

本会の研究会に出席し、会誌『或問』を購読する人を会員と認める。

本会は、言語学、歴史学、科学史等諸分野の研究者の力を結集させ、学際的なアプローチを目指している。また研究会、会誌の発行によって若手の研究者に活躍の場を提供する。学問分野の垣根を越えての多くの参集を期待している。

本会は当面、事務局を下記に置き、諸事項に関する問い合わせも下記にて行う。

〒564-8680 吹田市山手町 3-3-35 関西大学文学部中国語中国文学科
内田慶市研究室 (Tel.ダイヤルイン 06-6368-0431)

E-mail: keiuchid@pp.ij4u.or.jp

URL: <http://www2.ipcku.kansai-u.ac.jp/~shkky/>

UPL: <http://we.fl.kansai-u.ac.jp/>

代表世話人：内田慶市